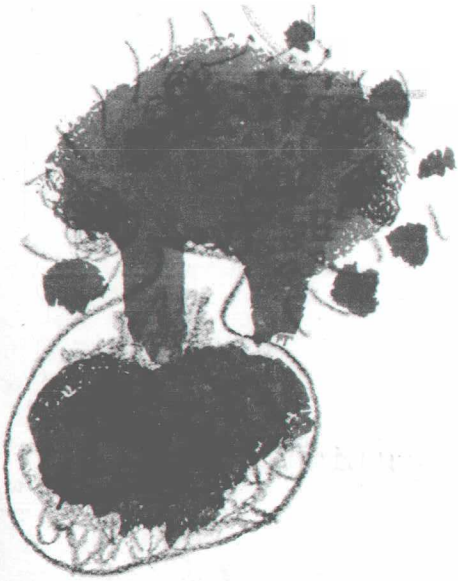
罪かなし夏子

舟橋聖一



新潮社版

罪かなし夏子

昭和三十七年八月二十六日　印刷
昭和三十七年八月　三十日　発行

定価　三百八十円

著者　舟橋聖一

発行者　東京都新宿区矢来町七一　佐藤亮一

印刷者　東京都千代田区神田神保町　塚田重

発行所　東京都新宿区矢来町七一　株式会社　新潮社
電話東京三局代表七一一一(九)
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・塚田印刷株式会社　製本・神田加藤製本所
© S. FUNABASHI Tokyo, 1962. Printed in Japan

目

次

仇な夜の夏子　七
指切りする夏子　三三
北斗星見る夏子　五七
春のとがの夏子　八四
古雛まつる夏子　一〇九
青いシグナルの夏子　一三四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

霧の若葉の夏子　一五九
夏子の桜んぼ　一八三
遠雷きく夏子　二〇七
素足になる夏子　二三二
堪えもやらぬ夏子　二五七
告げたるのちの夏子　二八五

装幀・カット

三岸節子

罪かなし夏子

仇な夜の夏子

秋晴れの上々天気が、よく続く。
丁度シーズンで、踊りの会、唄の会、浄瑠璃の会などが、立てつづけにある中で、佐久間氏が、この頃やり出した清元の温習会が大和ホールで催された。
大体が、清元をやるについては、夏子に相談がなかった。或日の朝、佐久間氏が、「神田祭」を、口の中で、低くうたうのを、ふと聞きつけて、
「オヤ」
と思ったのがはじめて。
「パパさん、どうしたの」
「何が」
「だって、今の、清元でしょ」
「うん」
「習ってるの」

「ちょっと」
「まア……どこで？」
「友達にすすめられたンで……小唄も少し飽きたから」
「ひどいわ。あたしの知らないうちに……」
「……そのうち、披露しようか、思うていたが、」
と、頭をかくが、夏子はそれを、彼のいう額面通りにはとらなかった。友達にすすめられたのではなくて、恐らく多恵子夫人の策動に由るものだろう。
「お師匠さんは？」
「志寿さんの弟子でな、延清寿という女の師匠だ」
「多恵子さんの御師匠さんとは、違うのね」
「そりゃ違う。同じ師匠やったら、夏子が角出すやろ思うてな」
「でも、清元だったら、多恵子さんの勢力範囲よ」
「そんなこともあるまい」
「いいわよ……好きなもの、おやりなさい。一々、横槍なんか入れませんわ、あたしは」
「まアよろしゅう、お頼みしますわ」
と、そのときは、それでおさまったが、こんど温習会へ出るについても、プログラムを渡されるまで、夏子は知らなかった。
出しものは、
「保名」
だった。とすると、「神田祭」の次が「保名」を一段通したのか。もの臭さの佐久間氏にしては、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

いやに、熱をあげたものだ。
「パパさん、大丈夫」
「やってみんことには、何ンともよう云えん……」
「凄いわね。……もっとも、この四日には、河東節の助六を、作曲二百年記念とやらで、素人の旦那衆や先生方が五十人もで、大合唱をするそうだから……」
「それも聞いてるが、合唱なら安心なもンや。一人で語るのとは、わけがちがう」
「声がふるえないように、たのむわよ」
「聞きに来るかい」
「もちろんよ」
「でも、本宅が大ぜい、押しかけることになってるが――」
「だって、二日おやりになるンじゃアなし、交代制ってことにもならないンでしょう……」
「せめて、昼夜ならよろしいがな」
「楽屋のお手伝いは、誰がするの」
「そりゃまア、多恵子や」
「へえ――」
これではどうも、分が悪い。
「それなら、かち合わないから、いいじゃない？」
「まア、うまくやってくれ給え。わしゃ知らんがな……無念無想で、語らしてもらいますわ」
と、うまく逃げる。
大和ホールは、温習会向きの会場である。楽屋もよく出来ている。多恵子夫人は、このときとば

かり、佐久間氏のそばへ、附きッきりで、万端、世話を焼き、他人は一切、寄せつけまい。その様子が、今からまざまざと見えるようである。そして、佐久間氏が、鼻の下を長くして、やに下っている顔までが――。

○

ふしぎなもので、佐久間氏が大和ホールの舞台で、「保名」を語ると聞いてからは、今までの佐久間氏と違った何ものかが、プラスされたように感じられる。

舞台の人に感じる一種特別の魅力――夏子なども、小夏時代から、ずい分それに憧れたものだが、今も決して、醒めてはいない。

そのためか、新叶家でも、

「役者にだけは、惚れてはならぬ」

というきついタブーがあった。役者は海千山千だから、結局、女に入れあげさせる。役者なんぞに惚れて、いいことはないというのである。

京都の大きな料亭では、たとえ千両役者でも、玄関の式台から出入りはさせぬと云う掟があったと云う。島原の角屋でも、役者は客にしなかったそうだ。それもつまりは、役者に出た傾城や芸者が、つい色深くなって、入れあげるのが困るからだ。

それを日本の女性の宿命とまでは云わないが、少くも一部の女には、男のくせに白粉を塗る役者衆に夢中になる古くからの習性があることは、否めないだろう。恐らく役者と名のつく者は、無形文化財の最高から、旅廻りのチンピラに至るまで、女の弱身を、ちゃんと知っている筈である。新派、新国劇、前進座まで、むろんのことだ。

今は昔、夏子の故郷の温泉場にも、ドサ廻りの役者が、遊びにくることがある。そういう晩の芸者たちの心の動き、目の動きの、異様さはさることながら、お座敷からお座敷へうごくたびに、

「今、誰がどこに――」

と、知らせ合う様子の只ならぬことといったらない。まして、少し有名な、売出し中の俳優だったら、村中が沸き返る位だった。役者ならまだしものこと、役者の付人や男衆にまで、夢中になった。

どちらかと云えば、夏子などは、そのタブーを守ったほうだ。

「あたし、役者や相撲取りと、浮気する気にだけはなれないわ」

と、夏子はよく云った。然し、表向きそうは云ったが、今、温泉場へ旅役者が来ているときくと、やはり何ンとなく、おちつけない気持だった。

それが段々には、映画俳優、声優、舞踊の師匠にまで及び、女の弱身を知っている玄人には、惣じて女は弱いものと相場がきまってしまった。

――佐久間氏が出かけたあと、夏子は久々に三味線をとり出して、昔弾いたことのある「保名」をさらってみた。

前弾から、

〽恋よ恋
　われ中空に、なすな恋
〽恋かぜが　来てはたもとに
　かいもつれ

位まではスラスラ弾けたが、

へ姿もいつか　みだれ髪

で、撥がとまったまま、きれいに忘れていた。口惜しいけれど、どうにもならない。もう一度、前弾へ戻ろうとすると、

プツン

と絃が切れた。まるで、佐久間氏との縁の糸が、これでプツンと切れたように。

三味線を擱き、絃をつなぐ気も萎えて、夏子は庭を眺めた。

さっき掃いたばかりなのに、もう落葉がつもっている。

○

この頃、佐久間氏の帰ってくる日が、三年ほど前にくらべると、ぐっと減っている。昔の半分以下だろう。

それを考え出すと、夏子は敗北感に暗くなり、胸の中がジメジメしてくるから、なるべく考えないことにしている。

それというのが、近頃の自分は、おかげで見る眼も広くなり、観察が複雑なところまで届くようになったとおもう。これはマスコミの影響かもしれない。新聞やテレビ・ラジオが、ずい分、いろんなことを教えてくれるので、小学校しか行かない夏子でも、いっぱしの社会学を身につけることが出来た。が、その代り、理屈が多くなって、時には佐久間氏を凹ますこともある。

女はもっと、バカなほうが、いいのかしらん。

得々と社会問題などを喋べったあと、どうも白々しくなって、たまらないときもある。夏子はそれを、自分でも気がついている。なまじ、理屈を云うようになってから、夏子は段々、色っぽいし

ぐさや、鼻を鳴らして、佐久間氏に甘える振りが、出来なくなった。
もっとも、すっかり変ったわけではない。やろうと思えば出来ないことはないだろうが、何かそうした身ぶりが、空虚らしくて、おいそれと、浸りきれないのである。
昔は、帰ってくると、すぐキッスして、出かけてゆくときも、またそうした。食事のあと、長椅子へ抱合うようにして寝たこともあれば、膝を貸して枕にさせたこともある。そういう仕ぐさが、何ンでもなく、抵抗なしに、すぐ出来た。
何ンといっても、男と女は、身体の一部と一部が接触すれば、そこから、体温がかよい出して、火ともなれば、炎ともなる。
それが近頃は、いつまで経っても、キッスもしない。とうとう、それなしで、出かけていってしまうこともある。
「せめて、キッス位して行こうや」
と、佐久間氏のほうが、忘れものを思い出したように云うこともあるが、そういうときでも、
「そうね」
と云って、気のりうすの返事をするもンだから、そのまま、
「では、さよなら」
と云うことになる。また、そのキッスにしても、熱烈で陶酔的だった昔のそれと違って、お座なりの、儀式的なそれである。
それに、さすがにそこまでは云いにくいので、黙っているが、佐久間氏も年をとったせいだろう、キッスの味が甘くない。昔はもっと甘かった。
恐らくそれは、口のまわりの筋肉が落ちて、口腔全体に、衰えが来たせいではないか。そういう

夏子だって、奥に一本、義歯がはいり、下の前歯と前歯に隙間ができたので、細い金の柱を入れて、その隙間を防いでいる。十九、二十の頃のように、まっ白いきれいな歯が、ズラリと並んでいて、飴でも氷でも、噛みくだいた頃のキッスのようにいかないのは、如何ともなし難い。もっとも、佐久間氏の歯にくらべたら、まだまだ、りっぱなものだが。

人間の老化現象は、二十五歳をピークとして、その峠をこすのだそうだが、これで佐久間氏のような老人でも、若い愛人を得たら、まだ新鮮で甘いキッスを楽しめるのか。

夏子は考える。

今から、こんなに老けこんでは、将来が思いやられる。しかも相手が若返って、大ぜいの前で、「保名」を語ろうという意気を示しているのだから、こっちも大いに張切って、色っぽい仕ぐさも、照れずにやってみるべきではないか。

こんど帰ってきたら、何も云わずに、顔をくっつけて、驚かしてみようかと思っているが、いざとなると、只、

「お帰ッなさい……」

と云うだけで、あとは、暑かったでしょう、とか、寒かったでしょう、とか附け加えておくだけだ。

つまり、キッスもしないし、抱擁もしなくても、心と心が深く相触れ、すべてが通じ合うというのは、長年の実績によるのだろうが、やはり、それだけでいい筈はない。

それに、夏子が求めなければ、誰かが求めるにちがいない。正直なところ、夏子が求めないのをいいことにして、佐久間氏は多恵子夫人の求めるままに、エネルギーを費い果しているのかもしれない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.